

# 中級の読解：テーマを決めて読む

春名万紀子

## 0. はじめに

本稿では、早稲田大学国際部の1997年度J11(中級)クラスで行なった授業を紹介しながら、テーマを決めて読むことの利点・欠点などを考えてみる。国際部の日本語教育は、J2からJ13までの12レベルに分けられ、週4日、1日135分(45分×3)、9月から6月まで30週行なわれている。J2からJ8までは初級教科書を使ってスタートする。大雑把に言って、9月の新学期が始まる時点でJ9、10が初中級、J11が中級前半、J12が中級後半、J13が上級前半ぐらいのレベルと考えられる。97年度のJ11は学生数が平均(秋、冬、春の各学期に多少の学生の異動がある)11名で、国籍は米国、英国、韓国、台湾、オランダ、オーストリア、香港と多彩だったが、日系の学生が多かった。

## 1. 教材の選定

学生は自国で初級教科書を終え、中級教科書に少し足を踏み入れたところで、初級文法・文型の一部はまだしっかり定着しておらず、使いこなせない箇所がたくさんあった。従って、読解クラスにおいて、文法・文型の指導も重要な位置を占めることになった。

語学教育において、コミュニケーションの重要性が唱えられ、「読む」教材としての生のものの優位性が指摘されている。しかし、中級レベルでは、初級文法の復習が必要であると同時に、文法をこえた文と文、段落と段落との繋がりや指示詞などの照応関係などに係わる談話文法や中級文

型など新しく導入すべき事項が数多い。それらを効率良く扱うには、生ではなく教材としてコントロールされた教科書が優れている場合もある。

このような事情から、教材として、中級用の教科書と新聞・雑誌などからの生の読み物とを併用することにした。教科書は『テーマ別中級から学ぶ日本語』（1991年初版：研究社）を使用した。この本が扱っているテーマには、「電車の中でのマナー」や、「日本社会におけるウチとソトの考え方」、「親子の断絶」、「地球の環境問題」、「脳死や臓器移植をめぐる医療問題」など現在の日本社会が抱えている問題が多いので、新聞・雑誌などから同じテーマについて書かれた記事や随筆が選びやすい。そのことがこの本を選んだ理由の主なものである。

語彙を増やすことも中級レベルでの重要な課題であるが、なるべく多くのもので読めば、物理的に多くの語彙にさらされることになる。同じテーマで書かれたものを複数読むことには、語彙の重複が期待できる。語彙の重複は、その語彙の記憶を促すと同時に、読む時の語彙による負担を軽減すると考えられる。

## 2. 教科書の扱い方

「読む」と一言で言っても、読み方はいろいろある。音読に対して黙読がある。私達が読書をする時は、大抵、黙読だが、黙読の仕方にも、精読、斜め読み、拾い読みなどがある。

教科書の本文については、予習として未習語の意味調べと大意取り (skimming) を宿題にした。授業ではまず始めに情報取り (scanning) の練習として、本文を黙読させながら○×式の10題の正誤問題のクイズをやらせた。次に音読をさせて、漢字の読み方やアクセントなどをチェックし、その後、精読作業に移った。本文は、内容をきっちり細部にわたって理解できるように、助詞、活用語の活用形、指示詞・代名詞の照応関係、接続の言葉、比喩、慣用句、行間の意味などに細かく注意を払って読んだ。それから、後ろの練習に取り上げられている中級文型の例文を補足し

ながら、接続の形などの構文的説明、意味、使い方などの説明をして、文作りは宿題にした。

最後に本文の内容について意見交換をしたり、次の読む生教材に繋がるように必要に応じて話を発展させたりした。

### 3. テーマを決めて読むことの利点

読む行為においては、まず文字、文字の組合せである語、そして語の配列としての文を認識して処理をしていくというボトムアップ処理だけがなされるのではなく、それと平行して、期待や予測をしながら読むというトップダウン処理も行なわれると考えられている。そして、理解は、読み物の言語情報から得られた意味をすでに読者が持っている知識体系にあてはめることで生じるとされる。読み手は、新しい情報や自分の期待や予測に反する情報の処理にはボトムアップ処理を、曖昧な点を解き明かすためやデータの複数の可能な解釈の中から最善のものを選択するためにはトップダウン処理を施しながら読み進むと考えられる。

上手な読み手は、このボトムアップとトップダウンの二つのプロセスを必要に応じてシフトしながら読みの行為を進めていくと考えられる。それに反して、未熟な読み手は、どちらかのプロセスに頼り過ぎる結果、理解に支障をきたすことになるが、その大きな原因の一つが、内容に関する知識の不足である。読み物の内容についてどれだけの知識があるかということが、その読み物をどれだけ正確に、深く理解できるかということに係わっているのである。それと同時に、そのことが、当然、読み取る速度にも関係してくる。

このようなことから、コミュニカティブ・アプローチでは、読む前に“prereading activity”として、これから読む物についての情報や知識を与えておくことの重要性を指摘している。読み手が前もって読む物についての適切な情報や知識をもっていれば、その読み物は理解しやすくなるし、深い理解が得られるのである。習熟度の低い学習者には絵など視覚に

訴えるものを通して情報を与えることが効果的だが、習熟度が上がれば、視覚に頼らない言語での情報を活用できるようになるという実験結果がある (Hadley: 1993; p. 145)。

教科書で精読したものと同じテーマで書かれたものを読む場合、学生は既にそのテーマに関する何らかの知識を持っていることになる。即ち、教科書を読む授業そのものが、次の生教材を読む際の“pre-reading”作業として位置付けられ、この作業によって語彙・文型などの言語情報と内容に関する一般的知識が前もって与えられることになる。一般的に言語情報より内容に関する情報の方が「理解」に大きく貢献すると考えられている。具体例を挙げると、教科書の第18課「かこむ」(資料1)は、親子の断絶を防ぐためには家族みんなで囲めるリビングルームの大きなテーブルが有効であるという話である。この課を読んだ後に、資料(2)、(3)、(4)を読んだ。資料(2)は三田誠広の随筆「ぼくのリビングルーム：家族の交流」(「朝日新聞」1997. 10. 5朝刊)で、自分がリビングルームで仕事をすること、そこに子供達が集まるので、親子の断絶とは無縁であることが書かれている。資料(3)は、AERA(1997. 12. 1号)の「子供を救う子供部屋のつくり方」という記事からの抜粋で、これは家族四人が一緒に使う共同机のお陰で家族が仲良くいられるという話である。資料(4)は家族みんなが仕事や宿題をする、大好きな大きなテーブルをテーマにした小学生の作文(「朝日新聞」1997. 10. 19朝刊)である。学習者はこのどれを読む時も、「親子の断絶がない / 家族が仲良くいられる」とことと「共同で使う大きなテーブル」の役割との関係に“予測”と“期待”を持ちながら読み進む。その“予測”なり“期待”に即している部分はすらすら読み進むことができるが、もし、それに反する読みが得られた部分があれば、自分の読み違えを疑い、修正するなり、それが正しい読みであることを再確認するなりするために読みの速度は落ちると考えられる。

テーマが同じということは、必ずしも上の例のように内容が同じというわけではない。人口問題という大きなテーマの下には、人口が多すぎる場

合と人口が少なすぎる場合がある。教科書の第23課「うたう」は野口雨情の「シャボン玉」の詩を取り上げ、「間引き」について書かれたものである。ここでは、同じく「間引き」がテーマの資料(5)「生まれて来ないはずだった私」(「朝日新聞」1997. 5. 20 夕刊)からの抜粋の外に、少子化問題を扱った新聞記事を二つ、うち一つは資料(6)、を読んだ。

#### 4. 生教材の読み方

駒井(1990)は、それまでの精読に片寄った「読む教育」は、「読む訓練」ではなく、「読み方の準備訓練」に過ぎないとし、「読む訓練」としての速読練習の必要性を唱えている。今では、速読用の教材も数多く市販されているし、川口(1994)のように生教材を使つての速読指導もなされている。『テーマ別中級から学ぶ日本語』も、ワークブックの中に速読用教材が用意されている。確かに、「読む教育」の目標の一つは、学習者がその言語で書かれたものを多読できるようになることであろう。「多読」の場合は、細かい点の理解よりも大意を掴む速度が重要になってくるので、授業での「速読」訓練が必要である。

速読指導においては、知らない語彙は辞書を引かせるのではなく、その意味を類推させることが訓練の一つである。駒井は、「学生が予習出来ないように、速読教材はクラスで配布して、1) 一語一語、一文一文の意味よりも話全体の筋を追って読むこと、2) 知らない単語があっても、飛ばして読み、字引を引かないことの二点に留意して出来るだけ速く読むように指示する」(同: p. 13)と述べている。

「速読」は、第一言語においても理解の深さが問題になるが、それは第二、第三言語においては更に大きな問題となろう。従つて、外国語の速読用の教材の選択に当たっては、話の展開の分かりやすさのみならず、未習語の数、文脈からの類推の可能性の大小などを考慮に入れなければならない。

しかし、教科書のテーマに沿って選ばれた生教材は必ずしも速読に適し

たものとは限らない。そこで、生教材は速読用に使用するものとそうでないものとの二種類に分けた。しかし、いずれのものも精読はせずに、粗読した。ここでいう「粗読」とは、「精読」に相對する言葉で、細部にとらわれすぎることなく、大雑把に読んで大意を掴むことを第一の目的とする読み方のことであり、「粗読」イコール「速読」ではない。重要な情報を捜し出す“scanning”と要旨を掴む“skimming”を生教材の読みにおける主要な作業とした。

資料(2),(3),(5)のように、速読することを要求しないものには、漢字の読みだけを付けた語彙表を渡して、自分で辞書を引ながら読むことを宿題にした。語彙表に訳語を付けないのは、自分で辞書を引、文中での意味を考える方が、語彙力を付けるのに役立つであろうとの考えからである。資料(4)のように語彙・構文がほとんど既習と思われるものや、(6)のような統計を扱った記事や事件を扱った記事などは、いわゆる速読に用いた。それらは、予習ができないようにクラスで配布し、前述のような語彙表も付けなかった。そして、内容についての質問などのタスクシートを読み物と同時に配り、タスクシートに“prereading”作業の役割を担わせた。そして、まず、その場で黙読しながらタスクをやらせた。

いずれの読み方の場合も学習者の内容理解度をチェックしたり、学生からの質問に答えたり、必要な補足説明をした後は、読み物に対する学習者の感想や意見を出し合う時間に当てた。横田(1998)が指摘するように、誌面上に記号として物理的に存在しているものに「意味」を持ち込むのは、読み手一人一人に任された作業であり、読み手自身の経験や知識の違いや変化によって、書き手の意味も読み手の中に、異なって構成される(p. 62)。従って、学習者がお互いの意見や感想を聞き合うことは、読んだ物に対するより深い理解や興味が得られることにも繋がる。例えば、資料(5)を読んだ時に、「母親の死後、筆者が間引かれるはずだったという事実をなぜお姉さんが本人に告げたか」が問題となった。男の子の誕生が重要視される国の学生からは、姉は、男だということで女である自分より

大切にされてきた弟がずっと憎かったのだろうという意見も出た。そこから、自分が筆者の立場だったらどうするだろうかとか、間引きされるはずだったということを含く悟られることなく筆者を育てた母親の愛情は素晴らしいなどということに話が発展した。これらの発言は、教師の質問に答えて出てきたものではなく、学生が自ら引き出してきた疑問点であり、話し合おうとした話題である。自分から自発的に書き手の言葉にはない部分を「読む」のが、読むことのおもしろさでもある。時間の許す限りこのような活動に時間を当てたが、残念ながら、話し合いを途中で切り上げることが多かった。

## 5. 学生へのアンケート結果

6月の最後の授業日に、教科書の読み物と同じテーマの別のものを読むことに対してどう思うか、学生に簡単なアンケート調査をした。対象は11名であった。まず、このような読み方に対しての賛否を尋ねたところ、賛成10名、反対1名であった。次にその理由を複数解答で答えてもらった。賛成理由をまとめると次のようになる。

- |                          |    |
|--------------------------|----|
| ① 同じテーマのものは内容が理解しやすい     | 7名 |
| ② 同じ言葉が出てくるから読みやすい       | 7名 |
| ③ 興味のあるテーマのものはいろいろ読みたくなる | 3名 |
| ④ 同じ言葉が何回も出て来るとよく覚えられる   | 1名 |
| ⑤ 文法や単語がよく学べる            | 1名 |

この結果を見ると、同じテーマで複数の読み物を読むことは、一つの物が次に読む物の“prereading”作業としてうまく機能しているように思える。

このような読み方に反対した学生は、その理由として、「同じテーマのものを複数読むよりなるべく多くの違ったものを読みたい」ということを挙げていた。確かに、限られた期間内になるべく多くの話題や分野について書かれたものを読むことを目標にした場合、このような読み方は適しな

い。また、そのテーマに関心、興味のない学生にとっては、同じテーマのものを複数読むことには学習意欲がそそられないであろう。これらの点はこのような読み方の欠点である。

## 6. 今後の課題

聴解は、読解と同様に、問題解決の活動と考えられる。意味を掴むために、読解は読みながら、聴解は聴きながら、仮説をたて、推論をして入力情報の曖昧さや不確実さを解いていく活動である。読む前の“prereading”作業が重要な役割を果たすように、聞く前の“prelistening”作業が、どこまで聞き取れるかに大きく関わってくると考えられている。

筆者は同じクラスの聴解も担当していたので、読み物と同じテーマのビデオ教材をいくつか聴解に使用した。そうすれば、読解の授業そのものを“prelistening”作業として活用できる。単身赴任について教科書で読んだ後に、ドラマ『単身赴任』を見た。血液型性格判断について書かれた課を教科書で扱った時は、生の読み物として「兄弟型性格判断」、聴解にはNHK テレビの『オモシロ学問人生：あなたは右脳型？ 左脳型?』を取り上げた。地球の環境問題がテーマの時は、生教材の一つに環境ホルモンの問題について書かれた新聞記事を取り上げ、聴解でその問題を扱った報道番組の一部をビデオで見た。これは数分のものなので、一回の聴解クラスで処理できた。しかし、前の二つのように25分から40分ほどの番組となると、数週間を掛けて見ることになり、読解の進度とずれが生じることになった。数分のニュースや10分程度の番組が活用できれば、もっと多くのテーマにおいて聴解を読解の授業と関連づけることが可能となる。しかし、そのテーマに合ったニュースなどがうまくその時にあるかどうか、あったとしてもタイミングよく録画できるかどうかなど難しい問題がある。

生教材は、学生自身に興味のあるものを選ばせれば、学生の主体性をもっと重んずることができるであろう。そのテーマに興味がある学生、二、



三人に新聞記事や本からの抜粋などを探して来させて、クラスでそれについて発表させる、或いは、みんなでそれを読むといった方法も考えたが、いろいろな意味で、適当な教材を学生に探させるのは難しいだろうという結論に達して、今回は見送った。学生をいくつかのグループに分けて、それぞれのグループにテーマは同じだが、内容の異なるものを読ませ、その後で読んだものについて発表させるというような形式の授業を数回行った。その際も読ませるものは全て筆者が用意した。

以上のような点を今後の課題として、読解授業の在り方を更に考えていきたいと思っている。

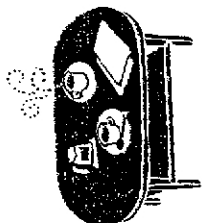
#### 参考文献

- Hadley, A. Omaggio (1993) *Teaching Language in Context* (2nd edition).  
Boston, MA: Heinle & Heinle Publishers.
- 春名万紀子 (1994) 「上級の読解授業——同一教材を多目的に利用した授業——」  
『講座 日本語教育』第 29 分冊
- 川口義一 (1991) 「中級クラスの速読指導」『講座 日本語教育』第 26 分冊
- 駒井 明 (1990) 「上級の日本語教育」『日本語教育』71 号
- 増井 透 (1998) 「速読の心理学的考察」『言語』Vol. 27 No. 2
- 小川貴士 (1991) 「読みのストラテジー、プロセスと上級の読解指導」『日本語教育』75 号
- 横田玲子 (1998) 「読む教育の復権」『言語』Vol. 27 No. 2



に、日本人は個人として自立しなければならぬ、そのために子供のときから独立した部屋を与え、早くから一人でやる習慣をつけることが必要だと習われるようになった。そこで親たちは子供の教育のために、自分は我慢してもせめて子供たちには個室を与えようとしてきた。ところがその結果、子供たちは食事のとき以外は部屋から出てこなくなりましたのである。また経済の高度成長とともに親も忙しくなり、子供と一緒に食事をする時間もなくなりました。家族はばらばらになり、気持が通じ合わなくなるといふ、いわゆる「親子の断絶」が起きてきたのである。おそらくこんなことの反省から、「こたつ」の役割を最大限として「リビングルームの大きなテーブル」が登場したのではないだろうか。ほのぼのと足の先から心の中まで暖めてくれる、「こたつ」に替わらなければならないのである。

啓蒙 (一)



\*暖桌 総省割 \*卓 登替 90



最近、新聞や雑誌で、新しい家族の団らんはどうあるべきかという記事を目にすることが多い。それによると、今までのようにリビングルームとダイニングルームを別々にせず、リビングルームを広く取って、そこに大きなテーブルを置いて家族みんながそれを囲んで生活したらどうかというのである。食事はもちろん、食後もそこで父親は新聞を読み、母親はセーターを編んだり、家計簿をつけたりする。子供たちはそのそばで学校の宿題をするのだ。自然に会話が多くなるというわけである。現に若い、しだがついて家族の結び付きが強くなるというわけである。現に若い世代の間では大きなテーブルがはやっている。それを中心にして家族の集まる場を作り出そうというのである。

もっとも、少し前の日本ではこんな光景はどこの家庭でもよく見られたものである。以前は、一般の家庭は狭く、一人一人が独立した部屋などとはとても持てなかつたので、多くの家庭が毎日の生活を二、三の部屋で済ませていた。当然食卓は、仕舞櫃でも御膳櫃でもお客を迎える場でもあったのだ。当時はストーブなどなかつたから、冬には「こたつ」が家族の集まる場になった。外の寒さにもかかわらず、「こたつ」の柔かい暖かさが、そこに集まり語り合う家族の心と一緒の暖かさにしてくれたものだ。一日の疲れは家族全員での団らんのうちに、いつの間にか消えていった。つまり食事や「こたつ」が家族の結び付きのシンボルであったと置える。

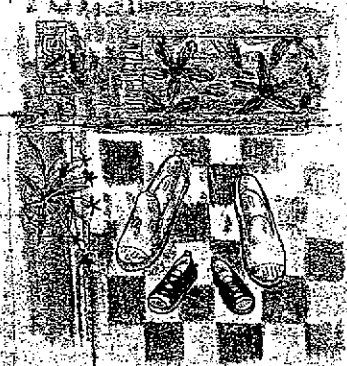
戦後、欧米の生活様式と考え方がたくさん入ってきて、それと同時に

\*雑誌 編 宿 \*結 \*光 泉 卓 机 \*柔 暖 \*静 \*和 \*消 歌 \*米

# The 16 ニュース

三田 誠 氏

「君は、この新聞をどうして読むのか。それは、君が、この新聞を通じて、世の中のことを知ることが出来るからである。君が、この新聞を通じて、世の中のことを知ることが出来るからである。君が、この新聞を通じて、世の中のことを知ることが出来るからである。」



## 家族の交流

家族の交流は、人間の生活にとって最も重要な要素の一つである。家族の交流が豊かになると、人間の生活はより充実したものである。家族の交流が豊かになると、人間の生活はより充実したものである。家族の交流が豊かになると、人間の生活はより充実したものである。

「家族の交流は、人間の生活にとって最も重要な要素の一つである。家族の交流が豊かになると、人間の生活はより充実したものである。家族の交流が豊かになると、人間の生活はより充実したものである。」



三田 誠 氏

# 子供を救う 子供部屋の 作り方

「ただいま」  
 劇団二年の藤野文雄さん(8)は  
 学校が帰ると早速階上に入り  
 共同机の探検試験の結果を伝えた。  
 「あ、いいじゃないか」  
 母藤野のふたは今年四年の頃  
 親子さん(8)がのびのびと、結構  
 いい生活だったって、二人の生  
 活は別々である。階上には母親の  
 教室さん(8)も、吹き抜けを遠  
 くに見えてくる教室にニッコリ  
 する。

十四年前に「共同机」で生活  
 された海野さん(8)は、「共同机」が  
 親子の生活の場。教室を早く  
 エキップ、ダイニング、階上  
 などの間に仕切りがなく、「階段」  
 の吹き抜けを取り除く形で、ま  
 らワンルームのような作りになっ  
 ている。

**狭すぎてもいい**  
 子ども達は朝早くから三層  
 ずつの広さがいい。ベッド作  
 り付けのクローゼットの後は、小  
 さな家具を置いてただけて二年にな  
 っています。

冬、親子さん(8)が中学生になつた  
 き、仕切りの部屋にしたためだ。  
 文筆通り教室外に慣れようがな  
 く、「閉じこもつたのも狭くて……」  
 推されたかったのは、そのせい  
 みない。

「閉じこもる」  
 と親子さんは言う。

そして、親子の生活の様子を  
 うべきものが、子ども部屋と階上  
 の間にあるオープンスペースに置  
 かれた大きな共同机だ。「階段」  
 もあり、家族全員が一緒に使っ  
 ている。木もベンチもそれぞれの欲  
 望を満たすために取られていた。  
 夜になると、高校の教授先生で  
 もある父(9)さんが、教室を  
 借りて研究資料ポートをワーロ  
 打もっている時、文筆さんが愛

護意識をして、階上を海野さんが手動  
 に取り組む。ワーロは一台で  
 ないので、扉を開くと親子さん(8)  
 「狭いぞい」だ。

親子さんはこの共同机が見渡  
 せるキッチンから呼ぶと体をさ  
 して、みんなを笑わせる。教室が一  
 段落りするこの階上のソファに  
 入り、テレビを見ながら、教室の四  
 の親子が愛家の話をひそかにして  
 いるので、聞くとともに聞いてい  
 ることも多い。

新築以来、毎晩机の権を階上座  
 り、子供たちに勉強を教え、その  
 日のいろいろな出来事や話があっ  
 てきた親子さんは、「この設計に  
 してよかった」として喜びを思  
 う。

「教員としていろいろな家庭や関係  
 を見てきましたが、問題のある子  
 どもは親子の接点が少ないことが  
 多いのです。毎日顔を合わせてい  
 れば、音や言葉がなくても、沈ん  
 でいるとか、子どもの変化の表し  
 に気づくことができます。そのこ  
 の家を建てるとき、昔のちゃん  
 台のように一家が一つ一緒に  
 される場所を作りたかったのです。  
 それをこの共同コーナーにしたこ  
 とは、私たちのライフスタイルに  
 も合っていて大成功です」

**父は仲間かつ神聖**  
 共同机のお陰か、海野さん(8)家  
 は本音が聞ける。親子さん(8)に  
 ついて父親は中国映画を語り合  
 仲間であると同時に、「神聖不可侵  
 存在」でもあると述べている。

「大空を飛ぶのときに、司法書士執  
 業のときに、当分の朝、父の一種  
 好きである。大空を飛ぶのときは  
 つたないです。それで自信がなくて  
 合点できなかったと思います」

いつも階上を勉強見守り続け  
 父の言葉が口に出ることも、親子  
 ならんと思っている。口には出さ  
 なかったが、親子さん(8)が、  
 親子さん(8)に父親を尊敬してい  
 ると述べている。

だが、いざいざとくめの子  
 どもは共同机で、子どもたちは  
 ら寝んじられ話があったら、思春  
 期の子どもにとっては、目の前  
 いると親の視線があるのが、驚い  
 く思われることである。

親子さんは学生のこと、友だ  
 ちの話をたずねれば、プライベート  
 一の保てる一人前生の専用机に話  
 されていた。

「日記とか手帳とか、親に見れ  
 たくないものまで書くこともあ  
 りますから」

高校二年のとき、家庭科の授業  
 で「子ども部屋あり方」について  
 大行ホールで考えたことがある。そ  
 ら思えば、親子さん(8)は、共同机の  
 中で仲間として生活するが家の  
 父、勉強も父に聞いて聞くこと  
 できるし、弟が飛び出さず、あ  
 ときは、父や親子さんに聞か  
 姿を見て、自分やどうしよう  
 になることに気づいた。

## 「大きなテーブル」

東京都品川区

品川区立浜川小学校三年

工藤

文美恵

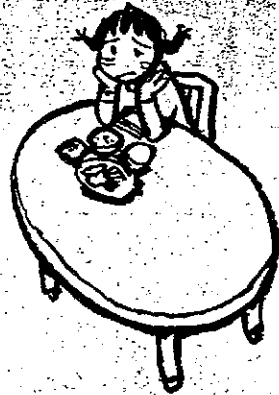
私の家には大きなテーブルがあります。お母さんがけこんした時に一番はじめに用意した家具です。

私は勉強づくえをもっていないので、このテーブルの自分の場所で宿題をします。その反対がわで、お母さんはいつも仕事をしたり手紙書いたりミシンかけもします。お父さんやお兄ちゃんも何かする時はここに来たりして、います。

テーブルには、小さなまきがいっぱいつきますが、油でまがくとほんとに臭いなくなりますが、つけてよく見ると私が赤ちゃんの時につけた小さなまきがあつたりしてなつかしくなります。私はこのテーブルとテーブルの場所が家中で一番好きです。

丸いテーブルはいつも四人で使いますが、お客さんが来た時には、ちゃんとみんながすわれるのでふしぎです。

ならず夕ごはんを食べに帰つたまた仕事に行きます。ある日お父さんから「今夜少しおそくなるので先に食べてなさい」という電話がありました。お母さんは中学生のお兄ちゃんが帰つたらごはんにしようと言いました。七時になってお兄ちゃんからクラブでじごがあったので少しおくれると電話がありました。お母さんは「おうちちゃんだけ先に食べてなさい」と言つて一人分の用意をしてくれました。



私はおながすいていましたが、食べはじめるとあまりおいしくありません。お母さんが「どうしたの」と聞いても、どうしてなのかわかりません。いつもはワイワイ言っているうちになくなるオカズも、ちっともへりません。

七時半になつたらお父さんとお兄ちゃんがいっしょに帰ってきました。お兄ちゃんは「ハフヘット」と手を洗わないでテーブルのオカズを見にきました。私は急いでお父さんのビールを冷やそうから出しました。

いつもの夕食がはじまりました。私は何度も「きょうきよくしなさい」と注意されました。お兄ちゃんからテーブルの下で、「一回けられて、いたかったけれどその日はそれほど気になりません。」

お母さんは私がけこんする時このテーブルをくれると言いました。「きれいにぬり直したら新しいのと同じになるよ」と言いました。わたしはうれしく、これにこの家に大きなテーブルがなくなるのはこまります。そしてしたらお母さんは「もつともつと大きなテーブルを買つてまつてお」と言いました。

大きなテーブルにはたなくさんの人があつります。もつと大きなテーブルにはもつとたなくさんの人があつまるでしょう。そういう日がくるのが楽しみです。

# 身分と 出逢い

松永 伍一

詩人

まつなが 伍いち 1930年福岡県生まれ。中学教師を経て文筆活動へ。独自の民俗学的視点で、幅広い著述を続ける。特集に『カッパドキア安脳』、評論に『一談論』『日本農民語史』『日本人の別れ』『若いを光らせるために』など多数。

『朝日新聞』(夕刊) 1997年(平成9年)5月20日

## 生まれて来ないはずだった私

日本に伝承されてきた守貞には、母の愛をうけたものばかりではなく、「間引き」の実態がほのぼのとしたものがあり、私はそれを巖・山村の懐かしき語り口で論じた。今日では「間引き」という言葉も死語になりかけているが、江戸時代では頭胎したり出産後に殺すことを総称してそう呼んだ。私はその歴史的事実・民俗の裏面を遠くの光景を見よりに眺めていた。

一九七三年、母が八十五歳で死んだ。

静世の歌を聞きながら、死の作法といろものを教えてくれた。

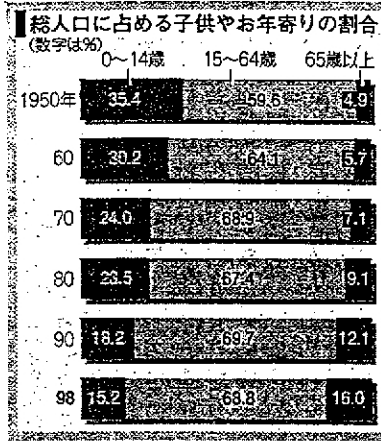
その数日後のこと、長姉が母の形見分けの席で、おもむろに、しかし軽やかな口調でこう言った。

「言い慣いど、あなたは本当は生まれて来ないはずだったのよ」

腰を刺されたように私は息をのんだ。

私は八番目の末っ子として、一九三〇年に生まれている。巖村が郷土に暮らして窮した年と重なる。しかも初孫も生まれよるころといたから、母は八番目の子は産むまいと決意して「間引き」を実行に移そうとした。が、失敗した。そして私が誕生した。

# 子供の数、戦後最低



中学生以下の子供の数、二%と、いずれも戦後最低が、昨年より三十三万人少を更新した。五日のこくない千九百十八万人で、終もの日」を前に、総務庁が人口に占める割合は一五・四月一日現在の十五歳未満

## 1918万人 65歳以上を下回る

の子供の数をまとめた。少子・高齢化時代を反映し、戦後初めて六十五歳以上の老年人口を下回った。

戦後の子供の数は、第一次ベビーブーム(一九四〇年代後半)後の五年の三千十一万人をピークに、第二次ベビーブーム(七〇年代前半)で一時期増えたものの、八三年から十七年連続の減少となった。

総人口に占める割合も、五〇年には三五・四%だったのが八八年には一九・五%と割合を下回り、以後も低下し続けている。一方、逆に最も低いのは東京都の二一・七%だった。

の四・九%から増え続けて、今年は一六・〇%となり、初めて子供の人口の割合が下回った。

韓国と比べても、日本の子供の人口に占める率はイタリアの一四・九%は上回っているものの、ドイツ(一六・三%)、フランス(一九・四%)、アメリカ(二一・八%)などよりかなり低い。

一方、昨年十月一日現在の子供の人口の割合を都道府県別にみると、最も高いのは沖縄県で二一・〇%。